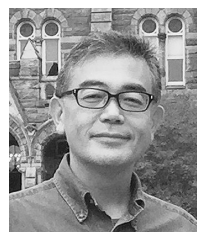


「英文法」とは何か



江藤裕之

英国で規範文法（学校文法）を大成したとされるマレー（Lindley Murray, 1745-1826）は、英文法を the art of speaking and writing the English language with propriety（英語を正しく話し、書く技術）と定義している。これはマレーのオリジナルではなく、それまで2世紀近くにわたって出されてきたさまざまな英文典に共通する定義を踏襲している。その淵源は、中世でもっとも人気のあったリリー（William Lily, ca. 1468-1522）のラテン文法にある文法の定義、すなわち grammatica est recte scribendi atque loquendi ars（文法とは正しく書き、話す技術）であろう。

この英文法の定義を見ると少しおかしなことに気づかないだろうか。それは、文法を「書く」と「話す」こと、つまり、言語の表出面のみに限定していることだ。英語を外国語として学ぶ私たちにとって、英文法とはとりもなおさず、英語を正しく理解するため、つまり、英文を正確に「読む」ために必要な技術ではないだろうか。それは文を構成する要素としての品詞の意味や用法について、そして、文の構造についての知識であったりする。では、なぜ規範文法では文法を書く、話すための技術としたのだろうか。

今日でも、文章を正しく書き、話すには高度の知的能力が必要であり、訓練が求められる。まして、識字率の低かった時においてはなおのことである。そういう時代に曲がりなりにも文章が書けるということは、そうでない人々から抜きでる技（art）を身につけたということであり、それだけで立身出世が約束されていた。まさしく officer や white collar になることができた。文法を学ぶことがきわめて実用的な利益をもたらした時代があったのである。

私たちが母語で表現する時にも言えることだが、上

手な文章を書いたり、人前でまともな話をするには訓練が必要である。それは、単に通じればよいといったものではなく、それなりの作法を習得しなくてはならない。マレーの文法の定義にあるように with propriety、つまり、作法通りに、襟を正して言いたいことを言葉で表現するという姿勢が求められる。

そのためには、基本的な「形（型）」を学ばなければならない。それは、手本となる良い文章を読み、それをまねながら、自分自身で文章を書く訓練をすることである。学ぶとはまねることだという。ある落語家の言葉だったと記憶するが、しっかりと形（型）を習得したうえでそれを超えていけば、それは「型破り」となる。しかし、形（型）を身につけないで我流でやるのは「形無し」であると。そして、この形（型）は有限であり、習得可能である。有限のものを理解し、使えるようになることで、そこから無限の可能性が広がっていく。

英語の文法のルールも有限である。語法は無限であるが、文法のルールには限りがある。英文法のエッセンスを学んで英語の基本を身につけ、あとは語彙を増やし、さまざまな表現を自分のものにしていけば、英語は必ずできるようになる。今日、文法はもはや立身出世のための道具とはみなされないだろうが、英語で正しい文章を書き、きちんとしたスピーチをすることができる能力は貴重である。

基本となる英語の形（型）を身につけること。ここに学校で英語を学ぶ意味があるのではないだろうか。その基本は文法である。英文法なんか無駄だと言っている人でも、文法的に英語を話している。文法はきわめて実用的なものであるという自信をもって教えたい。

（えとう ひろゆき・東北大学教授）